

ない。遡行を開始してすぐに二俣。右沢には5mの滝が見えている。これを見逃す手はないと右沢へ。5mの滝は右側を直登する。花崗岩質で、フリクションがよくきいた。このあと沢は左にカーブし、そこに10mの滝。直登できそうにない。右岸を捲きぎみに登り、滝の上にトラバースする。岩のモロイ部分があり、ちょっと緊張させられた。この先にも10mの滝がかかり、さらにその上部にも滝が出てきそうな雰囲気であるが、今日はここまでとして引き返す。

(記

[タイム] ダム湖(8:30)→二俣(9:45)→左俣終了(10:10)→二俣(10:20)→右俣最高到達点(11:15)→二俣(11:35)→ダム湖(12:40)

八溝山系の沢

鹿ノ又沢支流イの沢 (仮称) 1991年5月18日

5:50出合発。今年最初の沢登りは、シャワークライミングで始まった。イの沢(仮称)出合の2mの滝。規模は小さいが、なかなか幸先がよい。ところがである。この滝の上は、明るい造林地となっているではないか。おまけに、沢は林道と化している。もちろん、この林道は荒れ放題。とても車の通れるものではないが、いっぺんに遡行の楽しみを奪われてしまった。

造林地の中を遡ること25分。ようやく林道は終りをつける。それとともに、水の流れもとぎれてしまった。沢床にしきつめられた岩屑の所々に、少しだけ水流が顔を出す。もう流れはないに等しい。出合から30分遡った所で、遡行終了とする。

(記・西 和文)

[タイム] イの沢出合(5:50)→終了(6:20)

鹿ノ又沢支流口の沢(仮称)

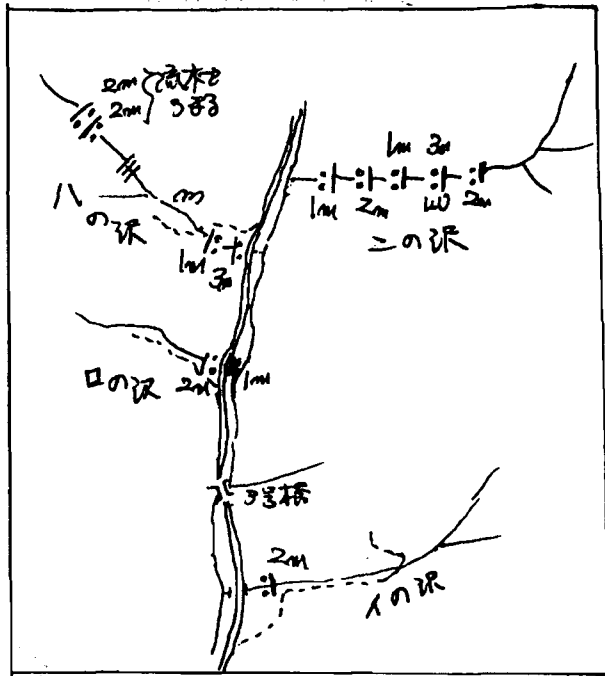
1991年5月18日

口の沢(仮称)は、林道のすぐわきに小滝をかける。はじめから沢の規模は小さい。おまけに出だしは腐りかけた流木の山との戦いである。うっかりしていると、ズッポリ足を突っ込んでしまう。伐採した時の残渣のようである。

流木の山を乗り越えると、今度はブッシュとの戦いである。強引に突破するしかない。とにかく前へ前へと進む。ようやくブッシュ

帯を抜け出した時には、沢はもう細いミゾ状の流れとなっていた。それを未練がましく更に15分程遡って、遡行終了とする。 ()

[タイム] 口の沢出合(7:00)→終了(7:30)



鹿ノ又沢支流ハの沢(仮称)

1991年5月18日

ハの沢(仮称)は、出だしに小滝を2つかけている。これを越えると、あとはもう細い流れでしかない。それでも更に暗い樹林帯の中を進む。やがて流木の山に出合う。これも伐採の時の残渣のようである。乗るとすぐ折れて、足をとられるので、やっかいである。ここを突破すると、すぐ若い造林地となり、沢の流れは流木の下に消えていた。 (語)

[タイム] ハの沢出合(7:45)→終了(8:00)